ジュラシック・トーク

「ヴァイナル」の歴史

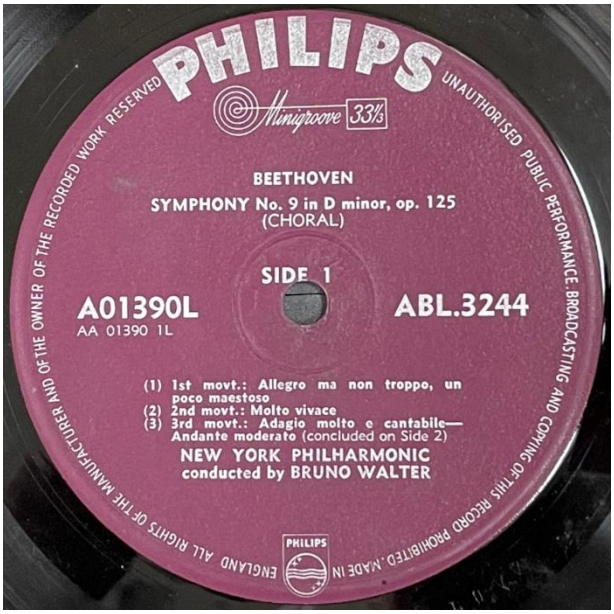
最近では、音楽作品を聴くのには、もっぱらインターネットによる配信が利用されるようになっています。「デジタル・リリース」という言い方で、特にポップスのジャンルでは、音源をダウンロードしたり、ストリーミングで聴いたりすることが、ほぼ日常的に行われるようになっていますね。それに伴って、「フィジカル」と呼ばれる CD のような再生ツールの販売は極端に少なくなっています。
クラシックの場合は、まだ、一応 CD の販売は続けられていますが、次第に「ネット配信のみ」というアイテムも増えていますから、早晩ポップスと同じような状況に陥ってしまうことでしょう
そんな中で、CD の前の再生ツールである「レコード」が、このところ人気を博しています。それは、単なるノスタルジアではなく、実際にレコードの方が CD よりも良い音であることに人々が気が付いたからなのでしょう。つまり、CD などで用いられているデジタル録音は、レコードなどのアナログ録音に比べると、特に高音域が特定の周波数以上はカットされているのです。それを是正するために、「ハイレゾ」と呼ばれるフォーマットも提唱されていますが、それは特別な再生装置が必要になるため、普通の人にはハードルが高くなっています。

その「レコード」で、現在も使われている何種類かのものは、素材としてポリ塩化ビニールなどが使われていますから、ビニール（vinyl）の英語読みである「ヴァイナル」と呼ばれています。ここでは、そのヴァイナルの歴史について、ちょっと語らせてください。

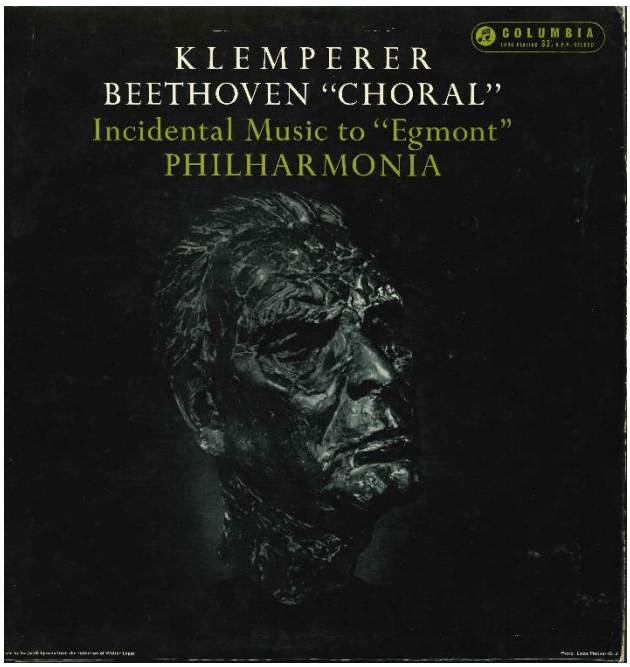
誕生

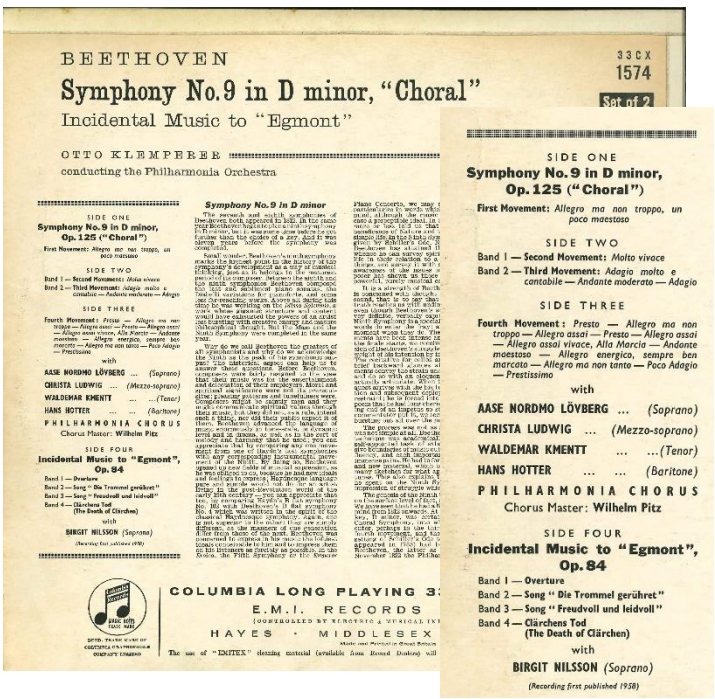
アメリカのレコード会社コロムビアが 1948 年に「LP(Long Playing」という名前で発表したのが、最初のヴァイナルでした。このプロジェクトは、1941 年ごろから、ピーター・ゴールドマークというコロムビアの技術研究員によって始められましたが、戦争のための中断をはさんで、最終的にはウィリアム・バックマンという人によって完成されました。それまであった 78 回転盤では、材質（シェラック）の特性として細い溝を掘ることができず、片面で 5 分程度の演奏しかできなかったものが、ヴァイナルを使うことによって細い溝（マイクログルーヴ）を掘ることができるようになり、回転数が 33 1/3 回転でも 78 回転盤をしのぐ音質とノイズの低下が確保されるようになりました。サイズは、78 回転盤を踏襲して直径 12 インチと 10 インチの 2 種類でした。12 インチ盤では片面 20 分以上、頑張れば 30 分程度の演奏も可能となったのです。
このころには、テープレコーダーも実用化されています。つまり、78回転盤では演奏しているものをリアルタイムでアセテート盤にカットして、レコードの原盤を作る、というやり方しかできなかったものが、一度テープに録音したものを編集して原盤（ラッカー盤）にカットできるようになったのですね。
そんな、革命的な LP では、ベートーヴェンの「第 9 」でも、 1 枚に収めることが出来ました。

手元にあるのが、この、ブルーノ・ワルター指揮、ニューヨーク・フィルによる「第９」の LP です（オリジナルはコロムビアですが、ヨーロッパではフィリップスがプレスしたものが販売されていました）。
ただ、第１楽章と第２楽章は A 面に収まりますが、第３楽章と第４楽章を B 面に収めること不可能ですから、A 面には第３楽章の途中まで演奏したところで中断が入り、そこでレコードを裏返す必要があります。このワルター盤の第３楽章は、A 面の３トラック目から始まり、83 小節目、アンダンテ・モデラートからアダージョの変わったところの１拍目までで終わっています。いちおう、きちんと終止しているのですね。そこで、レコードの B 面に裏返すと、その小節の頭から演奏が始まるようになっていてそのまま第４楽章に繋がるのです。



ただ、やはり第２楽章は続けて聴きたいものですから、普通は A 面＝第１楽章、B 面＝第２楽章+第３楽章、C 面＝第４楽章というように２枚組で発売されていましたね。残った１面には、別の曲を入れます。この、オットー・クレンペラーとフィルハーモニア管弦楽団の録音が、そのようなものでした。「コロムビア」というロゴがありますが、こちらはアメリカのコロムビアから分かれたイギリスの別会社で、すでに HMV と合併して「EMI」となっていました。



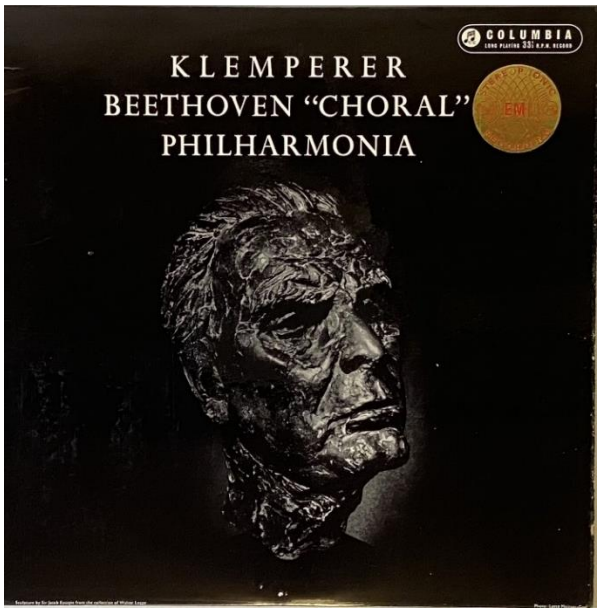


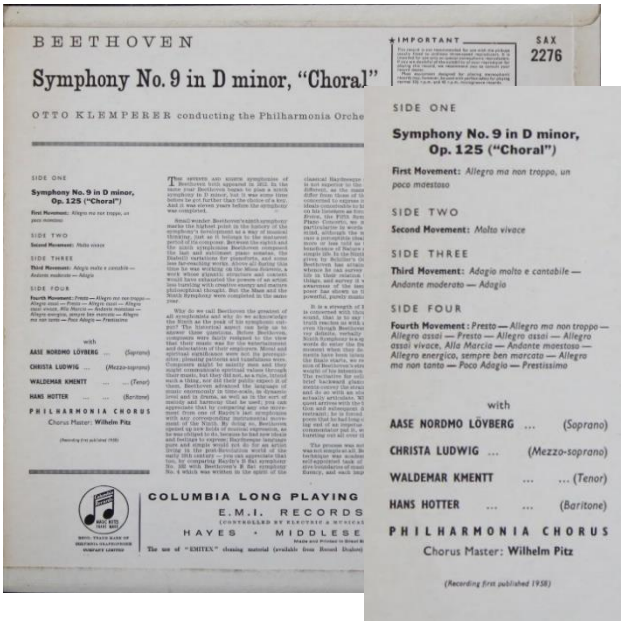
ここでは、D 面には「エグモント」の序曲と、何曲かのアリアが入っていました。
そして B 面には第２楽章と第３楽章が、ギリギリまでカッティングされています。

ステレオ時代

1940 年代には、すでにテープレコーダーではステレオ録音は可能になっていました。２つのトラックにそれぞれ右と左の信号を録音すればいいのですからね。ただ、レコードでは溝が１本しかありませんから、そのままでは１つのチャンネルしか録音はできません。そこで、様々な方式が提案されることになるのですが、最終的には 1958 年に「45/45 方式」という方式が、全世界共通の規格として採用されることになり、ステレオ LP の製造も始まったのです。

先ほどのクレンペラーの「第９」も、1957 年に録音された時には、すでにステレオになっていました。ただ、まだ世の中にはステレオの LP を再生できる人はそれほど多くはなかったので、まずはモノラルでリリースされます。そして、しばらくしてから、ステレオ・バージョンも発売されました。その時には、同じジャケットを使って、その上に「ステレオフォニック」というシールを貼っていたのですね。





ただ、ここにきて新たな問題が起こりました。ステレオでカットされた溝は、なんせ２つのチャンネルのための情報が入っていますから、モノラルの溝よりも若干幅広くなっています。そうなると、さきほどの第２楽章と第３楽章を１面にカットすることが不可能になってしまったのです。そこで、ステレオ盤では A 面＝第１楽章、B 面＝第２楽章、C 面＝第３楽章、D 面＝第４楽章と、２枚をフルに使うようになってしまい、「エグモント」は割愛されてしまったのですね。

45 回転盤

この間の 1949 年に、コロムビアの競争相手、ビクターが、45 回転、直径７インチというヴァイナルを発売しました。ただ、この規格では片面に５分程度しか録音できないので、1952 年には、EP（Extended Play）という、片面８分まで収録可能なヴァイナルも発売します。この辺りは、バックナンバー（Nr289）の「ジュラシック・トーク」をご覧ください。その際に、日本での EP 事情に関しては多少曖昧な記述だったので、その後判明した事実をお知らせします。

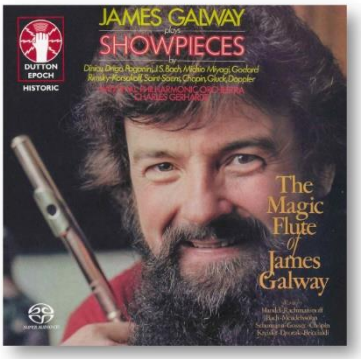
さるブログで、当時の雑誌記事などにアクセスすることによって、日本での「EP」についての事実関係を見事に解明されたものがありました。それによると、驚いたことに、日本で最初に 45 回転盤が製造されたのは 1954 年だったのですが、その時に作られたのが「EP」だったのですよ。つまり、日本人は、本来の 45 回転盤を知る前に、EP と出会ってしまったのですね。それに拍車をかけるように、レコード会社でさえも、普通の 45 回転盤と EP を区別しないで販売していたところもあったのだそうです。そんなところから、「EP=45 回転盤」という誤った認識が生まれてしまったのでしょうね。

いずれにしても、LP はたくさんの曲が入った「アルバム」、45 回転盤は片面に１曲だけが入る「シングル盤」という名前で、それぞれの棲み分けがなされて現在でも存続しています。2020 年には、山下達郎の「クリスマス・イブ」のシングル盤がリリースされていますからね。さらに、ヴァイナルとしての EP は姿を消しましたが、「LP とシングル盤の中間の収録曲」というその概念のみが生き残って、かつての「ミニアルバム」と同義語として使われるようになっています。

４チャンネル時代

1970 年代には、ステレオの左右の広がりを、さらに前後に広げることが可能な「４チャンネルレコード」というものが作られるようになりました。今でいう「サラウンド」、あるいは「イマーシヴ」のはしりなのでしょうが、あいにくそれを再生する方式が乱立して一本化には至らず、10 年ほどで消滅してしまいます。

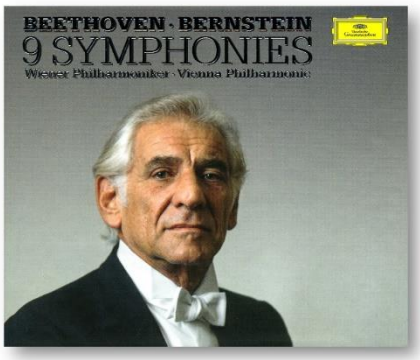
ただ、21 世紀に入って、ハイブリッド SACD やブルーレイ・オーディオ（BD-A）といった、サラウンド再生に対応しているフォーマットが出現すると、かつての４チャンネルの音源がそのまま再生できるようになりました。イギリスのダットンというレーベルからは、かつての CBS や RCA（現在は SONY）の４チャンネル音源が大量にハイブリッド SACD となってリリースされています。



さらに、当時は４チャンネルでの録音は行っていても、レコードは全く出してはいなかったドイツ・グラモフォンの音源が、最初はペンタトーンからハイブリッド SACD となってリリースされます。

→

そして、やがてはドイツ・グラモフォン自身からもサラウンドの BD-A としてリリースされるようになりました。



さらに、今年（2023 年）になって、ドイツ・グラモフォンから、その４チャンネルの音源を LP で復刻するという新シリーズ「オリジナル・ソース・シリーズ」（The Original Source）というものが発売されました。これは、別にサラウンドで再生できるわけではなく、オリジナル４トラック 1/2 インチ・マスター・テープから直接ピュア・アナログ・ミックス＆カットを行って作られた LP なのだそうです。1970 年代の４チャンネルの録音は、一旦ステレオ 1/4 インチ・テープにコピーされてカッティングが行われていたのですが、そのコピーの際に生じた音の劣化をなくしたため、クオリティを限界まで高められたのだ、ということです。